博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	中嶋　美貴
論　文　題　目	ルネ・シャールにおける反抗の風景 ―内的世界のなかの分裂する自己をめぐって―

審査要旨

これは 20 世紀フランスの大詩人ルネ・シャール René Char（1907～1988）を研究対象とした博士学位請求論文である。

シャールは第二次世界大戦中の対独レジスタンス運動の闘士だったこともあり、戦後、フランスの政治家や知識人たちが好んで彼の断章を引用したことでも知られている。

だが、生前の極めて高い名声にもかかわらず、ブランショやリシャールといった批評家の先駆的な評論等を除けば、シャールをめぐる学問的な研究活動の開始は、むしろかなり遅れたという感がある。フランス本国でも、アカデミックな専門家の著作が発表されはじめるのは、たかだか 30 年ほど前からのことにすぎない。

また日本においても、翻訳の試みはかなり早くから行われてきたものの、研究論文の数は近年になっても僅かなままで、本格的な研究書に至っては西永良成氏によって 2006 年に岩波書店から刊行された1冊を数えるにすぎない、というのが現状である。

ルネ・シャールという詩人が、日本の大学に提出される博士学位請求論文の題目としてとりあげられること自体、おそらく今回が最初であると思われる。

こうしたことの背景には、シャールの作風の例外的な難解さがあるとするのが大方の見方であろう。シャールの詩は、その断言調のアフォリズム的なスタイルが読者の心をわしづかみにする魔術的な魅力を備えているが、いざそれを学術的に分析・解釈し、その「意味」を分かりやすく捉えようとすると、そこに途方もない困難が待ちうけているといった類いのテクストなのである。

このように厄介な詩人をあえて研究対象に選んだ本論文の著者自身が、そうした問題性を誰よりも強く自覚していたことは、はじめの方でシャールの詩作を「説明できないことを説明できないものとして名付ける」行為であると、見事に定義していることからも如実に窺えるだろう。

以上のごとき問題意識のもとに、著者は本論文の作成にあたって、二方向の方途を採用している。ひとつは、シャールの詩的世界の核心に接近するための「クロノロジック」（詩人の形成史的）なアプローチであり、もうひとつはその拡がりと持続を展望するための「テマティック」（主題論的）なアプローチである。

最初のクロノロジックなアプローチは、従来の実証的な研究手法に近いもので、全3部構成のその第1部では、まずシャールの詩的形成を担った「外的要素」として。詩人の生い立ち、家族関係、生地の風土等が丹念に検証されていく。ここで用意周到に整理された伝記的事実は、後段での作品分析の重要な解釈的基盤となるだろう。

これに続いて、詩人を成長させたさらなる「外的要素」として、時代的に先行するフランスの詩人たちとの関係が検討されている。具体的には、ヴィクトル・ユゴー、アルチュール・ランボー、ポール・エリュアールの3者とのかかわりが検討の対象となっているが、著者はこれを狭義の影響関係として捉えるのではなく、逆にシャールの側からの能動的な批判、反抗ないしは共有・分割の関係として論じている。特に3人目のエリュアールとの詩的交流を詳細に検証している箇所では、シャールとシュルレアリスムとの微妙な関係が鮮やかに浮き彫りにされているのみならず、このことによりむしろシュルレアリスムの詩法の特質について貴重な照明が当てられることになったとの指摘が、シュルレアリスムの専門家である審査委員からなされた。

第2部に入り、いよいよシャールの作品世界をめぐる「テマティック」な分析が展開される。ここで中心的に扱われているのは、シャールにおける「解体された自己とその統合」の問題である。

19世紀後半以降、フランス詩はロマン派の「肥大化した自我」からの離脱を課題としてきた。ボードレールが

氏名　中嶋　美貴

大都会に溢れる群衆のなかに溶解していく「非−我」を発見し、ついでマラルメが書くという行為を司る非人称的な「無−我」を唱え、さらにランボーは「我とは他者なり」と宣言しながら絶えず自己を乗り越えていく「超−我」を追求した。

20世紀になると、アンドレ・ブルトンをはじめとするシュルレアリストたちはフロイトの精神分析理論を援用して、「無意識」という新しい自我の領域を開拓することになるが、シャールはそこからは一定の距離をとって、「死と再生」の弁証法によって発動される独自な詩的自我の可能性を探った詩人であったとするのが著者の斬新な見取り図である。こうした展望のもとに、「分裂」「他者性」「仮死」「忘我」といった関連するテーマ系も動員しながら、シャールの詩法のダイナミズムが次々と解き明かされていく。

そうしたなかでテマティックなアプローチがとりわけ効を奏すのは、シャールの内的世界の特権的な表象である「水」のテーマが「溺死」という出来事と絡めて展開されている、彼のシュルレアリスム期の代表作「水＝母　私は何に運命づけられているか」の長大な読解においてであろう。これはまさに本論文中の白眉ともいうべき箇所であり、「水」が詩人の自我の変容を仕掛ける基本的なツールとなっている点をこのうえない説得力をもって論じ尽くしている。

一方で、シャールの存在を従来のレジスタンスの神話から解き放つことを意図する本論文では、レジスタンス運動のさなかに書かれたテクストへの言及はさほど多くはないが、戦闘行動中のシャールが現実的な死の危険に直面するシーンで、分裂していた自己の統合が逆説的に果たされているとの鋭利な観察には脱帽するほかなかった。

第3部は、シャールのもう一方の「外的要素」としてのその奔放な女性関係のなかから、グレタ・クヌトソンとイヴォンヌ・ゼルヴォスという二人の愛人をとりあげ、いわば詩人のミューズとなった彼女たちがどのようにシャールの文学世界の構築に寄与したかを述べている。いかにも貴重な指摘となっているのは、彼女たちとの出会いによって「風景」の描写がシャール詩のなかにはじめて立ち現れてくるという点であろう。一方、ここで外部に広がる「風景」の問題を論じるのは、第2部における「死と再生」のテーマの緊迫した内的分析との整合性に欠けるのではないかという疑問が審査会において提起されたが、そうした違和感を引きずりつつも、シャール詩の難解性に対するアプローチがこのように複合的に用意されていることは本論文のポジティヴな意義だとされた。

最後に、シャールの最もよく知られた作品である、生まれ故郷の地を流れる川の光景を音楽性豊かに歌った名作「ソルグ川」に、イヴォンヌの名がアナグラム的に詠み込まれているという著者の「新発見」に審査委員一同が深い感銘を受けたことを申し添えておく。

これまで見てきたように、本論文は詩人の自我の分裂と統合というテマティックなアプローチを軸に、その「外的要素」に関するクロノロジックなアプローチを組み合わせて、ルネ・シャールの詩的世界の全貌を明らかにしようとした野心的な企てであり、はたして日本におけるシャール研究を強力に推進するに足る重要な成果を収めたものと判断された。さらにはフランス本国の本格的なシャール研究に比してもいささかも遜色のない独自性を優に主張できるだけの内容を十分にそなえた研究であると認められた。

以上をもって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると全会一致して判定するものである。

公開審査会開催日	2021 年　1　月　23　日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	川瀬　武夫	フランス近代詩	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鈴木　雅雄	フランス近・現代文学	博士（パリ第 7 大学）
審査委員	東京大学教養学部・非常勤講師	野村　喜和夫	フランス近・現代詩	

以上